

序

天文八年（一五三九）の歳末、大内氏の経営する遣明船の副使として中国に渡ってきた天龍寺妙智院の僧策彦周良が、三国志の故地、長江北岸の荊州近くの鍾吾駅で、次のような漢詩を詠んでいる（『初渡集』下之上、嘉靖十八年十二月三十日冬）。

遠離日域入真丹　遠く日域を離れ真丹に入り

為月今宵偶拍欄　月のために今宵偶たま欄を拍つ

回首人間尽胡越　首を回らさば人間尽く胡越

姮娥独作旧時看　姮娥のみ独り作す旧時の看

遠く日本（日域）を離れて中国（真丹＝震旦）の地に来たところ、今宵の月があまりに美しいので欄干にもたれかかった。あたりを見回せば、恰も見慣れぬ北の胡の国や南の越の国の人たちばかりだが、ただ独り、月に上がった姮娥だけがかつての姿をたたえている――。仙女たちのリーダー西王母から、弓の名手の羿が入手した不老不死の薬を、その妻姮娥（嫦娥）が盗み出し、やがては月に逃げてしまった（そこで蟾蜍になった）という故事（『淮南子』巻六―覽冥訓十二）を引いたもの

だ。月だけはどこで見ても変わらない、という結句からは、遣明使一行の望郷の念が看て取れるが、いま、この漢詩でもっとも注目したいのは、策彦和尚が自分のことを華人になぞらえている箇所である。「あたりを見回せば」、むしろ本物の華人たちがいるに違いないのに、それを蛮夷の「胡」や「越」と言つて憚らない。ちよつと笑いを誘うフレイズともいえるが、しかし笑つてばかりもいられない。

というのも、策彦和尚の一行は、北京において、朝鮮使節とのあいだで外交上のトラブル——座次の相論——を起こしていたらしいからである（『朝鮮中宗実録』三十九年四月壬辰条。村井章介『中世倭人伝』〔岩波新書、一九九三年〕二二八頁参看）。

司憲府〔大司憲林百齡―橋本註〕……且つ聞く、倭人、中原〔中国＝明朝〕に言して曰く、「朝鮮は我〔日本〕に服事す、我まさに其の上に序すべし」と云えりと。乃ち厚待の恩を念わず、反りて驕心を生じ、班を上国〔明朝〕に争う。其の言此くのごとく、辱のこれより大なるは莫し。

村井氏によれば、ここに見える北京に來た「倭人」こそ、天文七年度遣明使湖心碩鼎一行（副使が策彦周良）と考えられるという。明らかに、日本の遣明使一行の、朝鮮に対する蔑視観がうかがえるだろう。つまり、策彦和尚らは、中華への憧憬や同列意識を強烈にもちながらも、自らが中華皇帝への朝貢使節（の一員）であること——日本が中華そのものでないこと——をよく承知していた。だから、せめて朝鮮などよりも上の存在であることを国際的にアピールしておきたい、

と考えたのであろう。

直接の関係はないものの、類似の史料が、策彦自身の日記に残っている。策彦が入港地の寧波で、通事の周文衡に対して「吾が国は高く朝鮮・琉球の上に出づ、是れ曩昔以来の規なり」と筆談で語つたものだ（『初渡集』上、天文八年五月二十一日条。村井章介『海から見た戦国日本——列島史から世界史へ』〔ちくま新書、筑摩書房、一九九七年〕一九五頁参看）。ちなみに、日本からの遣明使節の中国での班次は、永正度遣明使のときに「殿西第七班」と定められた（『明武宗実録』正徳四年〔一五〇九〕十二月乙卯条。朝鮮使節が「殿東第七班」なので、ほぼ同等だが朝鮮よりも若干下という設定である。ともあれ、策彦は、自らは（主観的・希望的には）「華人」であり、朝鮮を一段下に見ていた、と概括することが許されよう。もちろんここで言う「華人」は、民族的出自に関わるものではない。

さて、以上見ただけでも分かるように、策彦たちの対外観・国際意識には、明らかに二つの相が確認できる。一つは他者崇敬としての中華（A）、もう一つは自己投影としての中華（B）、である。前者（A）は、文明の表象としての中華帝国に対するあこがれであり、ある意味で冷静に中華と日本との距離感を保っているといえる。しかしそれに近づきたくて仕方がない対象であることも事実だ。他方、後者の（B）は、自身こそが世界の中心であるとする、エスノセントリズムであり、フアナティックに自身（自国）を中華に「同化」させる発想——『幻想』——と言っても良からう。そして、恐らくはこの二つの相の折衷型（妥協点）として、古代・中世の日本においては、『中国＝対等、朝鮮・琉球＝下位』という独善的な国際意識が築かれていたのである。

こうした(A)・(B)の両極性をもつ室町日本の対外観・国際意識のことを、ちよつとこなれないけれども、本書では《中華幻想》と呼ぶことにしてみたい。中華帝国の周縁、極東に位置する東夷の「帝国意識」(末畑洋一『支配の代償——英帝国の崩壊と「帝国意識」』(東京大学出版会、一九八七年)参看)に命名するとすれば、この言葉が最適ではないかと考えるためである(普遍的な「帝国意識」の概念は、ポストコロナルな問題を考えるためのために、大切に取っておこう——上杉忍・山根徹也編『歴史から今を知る』山川出版社、二〇一〇年、八九頁参看)。しかも、この室町・戦国期の《中華幻想》には、「東夷の小帝国」(石母田正『日本の古代国家』(石母田正著作集3)岩波書店、一九八九年)が「中華帝国」たらんとするだけではない、微妙なニュアンスが込められている。中華にあこがれ、「中華なるもの」を自在に思い描き、それとのギャップにもだえ苦しむ、という一種の《妄想癖》である。つまり、ここである《中華幻想》は、ちよつといじらしくも複雑な、「帝国意識」の亜種なのだ。

さて、それではなぜ、室町日本の《中華幻想》などを殊更に議論の俎上に載せねばならないのか。「帝国意識」的な世界観が、つねに／＼どこにでも存在することなど、自明の事柄ではないか。ある集団が、他者との差異化、他者への優越感を必ず生み出し、それがその集団の凝集力に結果すること、超歴史的に確認できることである(小坂井敏晶『民族という虚構』(東京大学出版会、二〇〇二年)参看)。こんな分かりきった歴史現象について、どうしてわざわざ揚言する必要などあるのか。

まず、前掲(B)については、これまで、対外関係史の分野で朝鮮蔑視観の問題を中心に、多くの学問的成果が積み重ねられてきた。筆者もこの点について何度か述べたことがあるため、こ

こでは詳細は省略する(拙著『中世日本の国際関係——東アジア通交圏と偽使問題』(吉川弘文館、二〇〇五年)序章・第一章、拙稿「遣朝鮮国書」と幕府・五山」(『日本歴史』五八九号、一九九七年)ほか参照。また朝鮮観に関する最新の研究として、ロナルドドリトビ『鎖国』という外交』(日本の歴史(九)新視点近世史、小学館、二〇〇八年)を挙げておきたい)。だが、中世日本の史料を見ていく限り、朝鮮を一段下に見る世界観が支配的であったことは、もはや揺るがないであろう(もちろん、朝鮮王朝に大蔵経を求め続けた一事からも分かるように、「蔑視観」一色で中世の対朝鮮観が塗りつぶせないこともまた真実である)。そしてさらに古代にさかのばれば、新羅や百濟、高句麗、渤海などを日本の「朝貢」国のように扱っていたことは周知の通りである。なお、本書VII章でも、これに関連する問題を扱っている。

したがって、研究史上、より深刻な問題は、前掲(A)の方である。「中華へのあこがれ」という場合の《中華》の中身は何であったか。室町人たちは、それこそ《幻想》の《中華》を見ているに過ぎなかったのではないか。早くも結論を先取りしている観もあるが、フランス語の「シノワズリ *chinoiserie*」でもなく、斯界で使い古された「中国趣味」でもない、あえて見慣れぬ《中華幻想》の語を持ってきたのは、ほかならぬ室町人たちの、《中華》を何とか掬い取つてみたいと考えたからである。

ところで、本書で扱う室町・戦国期の日本社会は、前後の時代と異なり、非常に特殊な外交観の存する時代であったと巷間では捉えられている。なぜなら、周知の通り、十五世紀初頭、足利義満が約五〇〇年ぶりに中華皇帝の冊封を受け、「日本国王」(皇帝の臣下)となったからである。

これは、《中国と同列、朝鮮よりは上位》という伝統的な《中華幻想》の（B）系統から、明らかに逸脱した現象である。義満の受封（冊封受諾）は、自尊心意識丸出しの（B）系統よりも、中華へのあこがれの（A）系統が突出した結果、として捉えれば済む話なのだろうか。

ところが実は、こうした問題に関する研究自体、そもそもまったくなされてこなかったのである。というよりも、従来、義満の対明外交に関しては、その「皇位篡奪」計画の可能性とも相俟って、天皇権威超克のモメントとして漠然と高く評価されてきた（佐藤進「南北朝の動乱」〔日本の歴史9、中公文庫、改裝版二〇〇五年〕、今谷明『室町の王権』〔中公新書、一九九〇年〕など参看）。そして、こうした議論があたかも自明の前提であるかのように、たとえば歴代室町殿の唐物コレクションの歴史の評価は定められてきたのである。すなわち、室町殿の唐物趣味は現実の冊封関係を周囲（とりわけ天皇・廷臣たち）にアピールするための道具であり、天皇権威を超克しようとしていた証左なのであった——というように（本書Ⅲ章参看）。

しかし、これはむしろ研究者側の予断（期待ないし希望？）に過ぎないのではないか。義満や以後の歴代室町殿たちは、中華皇帝の臣下たる「日本国王」の地位に、本当に「満足」していたのだろうか。彼らの対明外交展開の「真意」は、いったい奈辺にあったのだろうか。そして、室町・戦国期の対外観は、それまでの「東夷の小帝国」意識とどれほど隔絶していたのだろうか。本質的な変化など、存在しなかったのではないか。——筆者はこのように、この問題について根本的な再検討が必要だと考えているのである。

だが急いで付け加えると、筆者は、古代以来の《中華幻想》が、不変不動のまま脈々と中世——さらには近世・近代——へ引き継がれた、というような本質主義の立場を採っているわけではない。そうした本質主義や超歴史的観点は、《なぜ中華幻想が継続したのか》という問いを本質的にしりぞけてしまうからである。歴史研究としては、ある時点の《中華幻想の何たるか》を明らかにすることはもちろん、《中華幻想がなぜ続いたのか》という歴史的条件を説明していくこともそれ以上に重要であろう。もし、ある時期の誰かが《中華幻想》をもっていたのであれば、そのような意識が選び取られたのは何故か、またそれはどのような状況下においてだったのかという《歴史の現場》を出来る限り復元していかねばならない。前述の（B）の相に関してはとくにそうである。

そして、本書がなぜこうした点にこだわるのかと言えば、対外関係史研究の泰斗、故田中健夫氏による次のような指摘を念頭に置いているからである。「異国認識における誤解・曲解が対外関係史展開の方向を左右した事例は枚挙に遑がない」が、しかしその「誤解・曲解は、国際的諸条件の交流のなかから生みだされたもの」でもある、という至言だ（田中『東アジア通交圏と国際認識』〔吉川弘文館、一九九七年〕七八・八一頁）。つまり、対外観とは、対外関係のなかでつくられるものであると同時に、逆に対外関係を規定していく側面が強いのである。一見連続しているかに映る国際意識の問題も、連綿と繰り返される《意識の選択》がそうさせているに過ぎない。だとすれば、歴史研究者には、《選択》の現場を追究し続ける義務があるだろう。本書では、室町・戦国

期という時代に的をしぼり、明らかに《幻想》に過ぎない過去の残映が、人びとの意識を支配していく瞬間を出来る限り切り取ってみたい。

そのためにも、いわゆる政治的・経済的側面だけでなく、文化的・社会的側面についても配慮し、なるべくトータルに考えていこうと思う。政治Ⅱ文化論的なアプローチだと言えれば分かりやすいかもしれない。ただ、すべての室町人のコスモロジーについて論ずることなどできないので、勢い、室町殿（室町幕府の首長）とその周辺に議論が限られることになる。この点、あらかじめお断りしておきたい。

羊頭狗肉になることは間違いないが、ほぼ以上のような問題意識と目的とをもつて、本書『中華幻想』を世に送り出す。繰り返しになるが、本書の核的テーマとなるのは、『中華幻想』と筆者が名づける、対外観と自意識との総合、つまりは室町・戦国期日本の国際意識の解明である。あるいは、中世日本の外部との現実的あるいは想像的な外交によって形成される、政治Ⅱ文化的な国内秩序観の分析、と言うべきか。したがって残念ながら、重要な仏教・神道的世界観の問題などは本書では完全にオミットしてしまった。ただ、ここで筆者が論じようとしている課題が、そうした宗教的な世界観の問題とはまた次元を異にすることも御了解いただけるであろう。

よって、本書においては、現実におこなわれた外交・通商にうかがえる国際意識の特徴と、日本国内の政治Ⅱ文化におけるその変奏——無理解ないし曲解と言ってもよい——とに論点にしば

ることとした。そのため、本書副題の「唐物と外交の室町時代史」に示した通り、この時期の外交儀礼の実態や対外観・国際意識を論じた試論や、唐物の贈与や蕩尽に関わるノートを集めて、本書を編んだ次第である。なお、改めて言うまでもないことと思うが、ここで企図している「政治Ⅱ文化論」とは、権力闘争や行政・裁判等にとどまらぬ広義の「政治」の文化を探ると同時に、「文化」の（あるいは「文化」による）政治のありようにも迫りたい、というものである。この時代の文化が単なる学芸活動や個々の芸術作品を意味するわけではなく、政治や経済の領域に不可逆的に浸みだしていくポテンシャルを持つていたことは、これまた贅言を要さないであろう。むしろ問題はその具体性の解明にあると考える。本書ではそれを、唐物（文化）と外交（儀礼）の実例に即して考えてみようという目論みなのである。

それでは以下、本書の読書案内を兼ねて、各章の概要をいかいつまんで紹介しておこう。

Ⅰ「室町殿の《中華幻想》——足利義満・義持期を中心に——」では、十五世紀の前半期を中心に、室町殿周辺で見られた対外観の問題について考察する。そのなかで、中華帝国と周辺東アジア諸国を結んだ「冊封関係」が、中世日本においてどのように換骨奪胎され「再解釈」されていたのか——それをロジェ・シャルチエの言葉を借りて《我がものとしての利用 appropriation》と呼んでみた（訳語は近藤和彦『民のモラル——近世イギリスの社会と文化』〔山川出版社、一九九三年〕による）——、また歴代室町殿のもつて《発酵》した唐物文化が、いかなる世界観に裏付けられていたのか——あるいは逆に唐物たちがいかなる世界観を醸成していったのか——について論究する。十

五世紀前半の室町殿たちを中心に、室町人がいったいどのような《中華》を《幻想》し、なおかつ内在化させていたのかを考えるという点で、本書の総論的役割も持たせている。

II 「渡唐天神説話の源流と流行」が扱うのは、鎌倉末期に大宰府で生まれ、室町前期の応永年間に京都で大流行を見せる渡唐天神説話である（そうした意味で応永期・足利義持論の一角を担う）。この渡唐天神説話は、太宰府で歿した菅原道真が杭州径山の禅僧仏鑑禅師無準師範のもとで禅を修める、という荒唐無稽な伝説であり、多くの渡唐天神像とともに今に伝えられている。とりわけ大宰府の地にあつては、まさしく《中華へのあこがれ》を地で往く日本人渡海僧たちの「伝法衣」熱が、この説話の誕生・流行の背景に存在していた。この伝説のプロットの種類のある墨蹟史料に探り当てるとともに、この説話・肖像がなぜ応永年間に京都で流行するようになったのかについても論及する。

III 「皇帝へのあこがれ——室町殿コレクションと《皇帝の絵画》」は、もっぱら足利義教時代に焦点を当てる。主たる題材は、永享九年（二四三七）、後花園天皇の室町殿行幸である。このとき、室町殿の邸宅（主に会所IIパーティ会場）に展開した將軍家コレクションの陳列空間が、室町殿周辺のいかなるコスモロジーと即応していたのか、現実的な国際関係としての冊封関係とどの程度関連していたのか、という点について論じている。ある意味で、できるだけ冷静に、ストイックに考えようとしたものである。その結果——いささかセンセーショナルな物言いとなるが——、室町殿は（通説の言うように）「国王」になりたかったのではなく、むしろ「皇帝」にこそな

りたかったのだという結論に達した。なお、内容的にはI章に直接つながるものなので、むしろI章・III章（そしてIV章）と読み進めてもらう方が読者には分かりやすいかもしれない。

IV 「大内氏の唐物贈与と遣明船」では、大内氏から室町殿II足利義政に対して行なわれた複数件の唐物贈与に注目し、その背景に、遣明船経営権利の要求という政策的意図のあったことを究明した。そして、明皇帝への朝貢品の調達費を誰がどのように調達するかという点が、遣明船経営の歴史を考えるうえでは決定的に重要であることを論じている。すなわち、嘉吉の土一揆における幕府財政の退転と、その後の朝貢品調達費負担をめぐる大内氏との駆け引きこそが、遣明船の歴史を変転させる大きな要因なのであつた。

V 「『善隣国宝記』節記」は、瑞溪周鳳の撰にかかると『善隣国宝記』を紹介したノートである。『善隣国宝記』は、室町幕府の対明・対朝鮮外交II貿易を行なううえで必須のアイテム、国際外交文書の作成指南書として書かれた。つまり、室町幕府や京都五山の対外観を知るには最適な史料だと言つてよからう。当然、本章もその点に心を砕いて執筆している。

VI 「永楽銭の史実と伝説」では、永楽通宝に関する話題にフォーカスして、中世後期日本社会における貨幣の流通状況や伝説・言説の草創・流布の経緯について考察している。具体的には、たとえば、足利義満期の銅銭輸入が巷間で言われているような「義満の貨幣発行権獲得」などでは到底ありえなかつたことを正面から論じており、I章と併せれば、義満の対明外交の歴史的意思を根本的に再考する内容となつたと言えるだろう。また伝説や言説の世界に改めて注目すると

いう点で、一味変わった貨幣史の論文になったのではなからうか。

VII 「朝鮮国王使と室町幕府」は、一転して、室町幕府・京都五山周辺のもっていた対朝鮮・琉球蔑視観について具体例を提示する。つまり、前述の《中華幻想》の(B)の相に関する議論である。朝鮮国王使(通信使や回礼使などを総称してこう呼ぶ)の迎接・接遇(受け入れ)プロセスに注目し、幕府―守護体制がどのように機能していたのか(いなかったのか)、室町殿はいつたいどの程度、真の中華たらんとしていたかを推し量るものだ。

以上で、長すぎる序文をそろそろ終えることにする。くどくどと述べてきたが、基本的に各章それぞれ独立した題材を扱っているので、実はどこから読んでいただいても構わない。気になった箇所、目についたところから読み進めてほしいと思う。

ではさっそく、小著『中華幻想』の幕をあけることとしよう。